

屈折音節におけるゲルマン祖語の [s, θ]

——ヴェルネルの法則に対する例外——

森 基 雄

ゲルマン諸語の屈折接辞の末尾子音には、ヴェルネルの法則 (Verner's Law) による有声化に対する例外であるかのような結果音を示す場合がいくつか見られる。それには次のものがある：西ゲルマン語における動詞の直説法現在2人称単数の s, イングヴィオニック (Ingvaenic, Ingv.) における動詞の直説法現在3人称の単数と複数の θ, 西ゲルマン語における弱変化動詞の直説法過去2人称単数の s, 西ゲルマン語のなかの古サクソン語と古高地ドイツ語における動詞の接続法2人称単数の s, 北, 西ゲルマン語における a-語幹名詞の属格単数の s, 古英語と古サクソン語における a-語幹名詞の主格と対格の複数の s。

本稿では、このヴェルネルの法則の例外のように見える末尾の無声摩擦音 s, θ の存在をどう説明すべきかを考えてみたい。

まず、OE *bindes*, OS *bindis*, OHG *bintis* (Go. *bindis*, OI *bindr*) 'you bind' におけるような直説法現在2人称単数接辞の末尾子音 s についてであるが、例えばこのように強変化動詞で見ると、この接辞は IE *-esi* に由来する。そして初めから語根の方に強勢があったという前提に立てば、この接辞の本来予想される発達は、IE *-esi* > Gmc. *-izi* > WGmc. *-ir* (> OE *-er*, OS, OHG *-ir*) となるか (Wright & Wright 1925³: 256; Campbell 1959: 297; Brunner 1960-2², II: 175), あるいは末尾の i の早期の消失により、Gmc. *-izi* は i-語幹名詞の主格単数のように *-iz* となり、結局 WGmc. *-iR* > *-i* (> OE *-e*, OS, OHG *-i*) となるか (Fullerton 1975: 87) のいずれかであろう。

現に古アイスランド語では *bindr* (<PN **bindiR* < Gmc. **bindizi*) という予想どおりの結果を示している。また、北, 西ゲルマン語とは異なり、Gmc. *z* の顛動音化 (rhotacism) のないゴート語においても、Go. *bindis* は (Gmc. *-izi*) *-iz* が末尾での有声摩擦音の無声化により *-is* となるという、予想どおりの発達を示しており、問題はない。

次はイングヴィオニックにおける、OE *bindep*, OS *bindith* (Go. *bindip*, OHG *bintit*) 'he binds' におけるような直説法現在3人称単数接辞の、そして OE *bindap*, OS *bindath* (Go. *bindand*, OHG *bintant*, OI *binda*) 'they bind' におけるような直説法現在複数接辞の末尾子音 θ についてであるが、例えばこのように強変化動詞で見ると、前者の接辞は IE *-eti*, 後者の接辞は IE *-onti* に由来する。初めから語根の方に強勢があったという前提に立

てば、両者はそれぞれグリムの法則 (Grimm's Law) により $-i\theta i$, $-an\theta i$, 後にさらにヴェルネルの法則により $-i\delta i$, $-an\delta i$ となったと考えられる。そしてさらに、この δ の閉鎖音化により、前者は弱変化動詞の過去分詞のように Gmc. $-i\delta i$ > WGmc. $-id$ > OE $-ed$, OS $-id$ として後者は nd-語幹名詞のように Gmc. $-an\delta i$ > WGmc. $-and$ > OE, OS $-and$ となるのが本来予想される発達であろう (Wright & Wright 1925³ : 256, 258 ; Campbell 1959 : 297)。現に同じ西ゲルマン語に属する古高地ドイツ語では、その WGmc. $-id$, $-and$ が第2子音推移を被った結果音である $bintit$, $bintant$ という予想どおりの発達を示しているのである。また西ゲルマン語以外の場合についても見てみよう。前者の接辞を有する Go. $bindip$ 'he binds', PN $b\bar{A}riutip$ 'he breaks' の末尾の θ の場合は、Gmc. $-i\delta i$ > $-i\delta$ の δ は母音の後であるため予想どおり閉鎖音化は受けてはおらず、末尾での無声化のみを示している。そして後者の接辞を有する Go. $bindand$, OI $binda$ の場合も、Go. $-and$ は明らかに鼻音の後の閉鎖音化を示しており、OI $-a$ は $-and$ > $-ann$ > $-a$ という音過程の結果であり、問題はない。

また IE $-ete$ を反映する直説法現在2人称複数接辞についても論じるべきであろうが、この接辞の子音は、そしてその環境も3人称単数の場合とまったく同一であり、イングヴィオニックでは複数形の接辞はすべて3人称形へ統一されているため、あえてここでは取り上げないことにする。

ここまでは動詞の直説法現在に限定して見てきたが、西ゲルマン語においてこのようにヴェルネルの法則に対する例外とも思えることが起こっているのはなぜであろうか。

この問題に対する納得いく解答が望まれるところであるが、Wright & Wright (1925³ : 258), Campbell (1959 : 297), Brunner (1960-2², II : 175, 176, 177), von Kienle (1969² : 279, 280) は、それは語根母音ではなく、連結母音に強勢を元来持つ方の、従って接辞子音がヴェルネルの法則を示すことない方のタイプに由来する、あるいはそれを一般化したためであるという見方をしている。また Streitberg (1896 : 291) は Ingv. $-\theta$ に関してのみ、そして Prokosch (1939 : 210) は Ingv. $-s$, $-\theta$ に関してのみ、そう考える。

このように一方のタイプを一般化したという考え方に従うならば、その一般化が(1)すでにヴェルネルの法則に先立って起こっていたという場合と、(2)ヴェルネルの法則と強勢の語根への固定後に起こったという場合とが考えられる。(1)の場合、King (1968 : 249-50, 250-51) の言うように、語根末子音が印欧祖語の無声音に由来する、例えば OE $snipan$ 'to cut', $t\bar{e}on$ 'to draw' (<POE $*t\bar{e}oxan$), $c\bar{e}osan$ 'to choose' のような強変化動詞の現在形の語根末子音はむしろ、その過去複数や過去分詞と同じヴェルネルの法則による結果音の方を反映していたはずである。また(2)の方の可能性を考えたとしても、King (1968 : 253) の言うように、3人称の単数と複数、2人称複数を見る限りでは古高地ドイツ語はゴート語そして古アイスランド語と同じく語根の方に強勢を有していた形を一般化した方言ということになる反面、同じ古高地ドイツ語においても2人称単数の s だけが逆に依然として説明がつかないままである。

むしろ King (1968 : 259), そして Fullerton (1974 : 72) は, ゲルマン祖語の段階ですべてヴェルネルの法則による有声音 *z, δ* が一般化されていたと考える。Fullerton (1974 : 72) は, 特にこのことをより確実に裏付けする証拠として, ゴート語の受動態直説法現在の2人称単数の *salbōza, habaiza*, 3人称単数の *salbōda, habaida*, 3人称複数の *salbōnda, habainda* を挙げている。すなわち, これらの動詞の語根末子音はヴェルネルの法則の結果を反映していると思われるものであり, 従って強勢はもともと語根後位置の *ō, ai* の方であったと考えられるのであるが, その場合ですら現にヴェルネルの法則を反映する結果音が後続しているのである。

2人称単数の *s* について Fullerton (1975) は, 動詞の2人称単数形にはよく WGmc. *θu* 'thou' が後続するため, それはヴェルネルの法則による2人称単数接辞の末尾子音 *z* と後続の *θu* とが結合した結果, *z* が無声子音 *θ* の前で逆行同化により *s* に無声化されたことに起因するという考え方を支持している。これは WGmc. *-s* に対して Streitberg (1896 : 291, 320) が, また OHG *-s* に対して Prokosch (1939 : 210) がとった考え方である。他方 King (1968 : 260) は, *s* がこのような結合から来る同化に由来するという説明は *ad hoc* であるとして退けている。しかし Fullerton (1975) は根拠として, 2人称単数の接辞が, *z* と *θu* との結合に由来すると思われる *-stu* という形で実際に古英語と古高地ドイツ語において例証されるという事実を挙げており, それは *-sθu > -stu* という音過程の結果であるとしている。Fullerton (1975) は, Gmc. *st, xt, ft* における表層の *t* はすべて, /*θ*/ を無声摩擦音の後で閉鎖音に変える音韻規則が働いた結果であるとさえ主張している。

King (1968 : 255-8) は, この *θu* との結合という考え方は否定しながらも, ヴェルネルの法則による *z, δ* を出発点としたうえでの理論の展開に入るに当たり, 次のような音韻規則を考える: (A) *β, δ, γ* を語頭, 鼻音後位置, 重子音において *b, d, g* に変える規則; (A') 古高地ドイツ語において, すべての位置で *β, δ, γ* を *b, d, g* に変える規則; (B) 摩擦音を語末で無声化する規則; (C) *z* を *R* に変える規則; (D) *d* を *t* に, *θ* を *d* に変える古高地ドイツ語独自の規則。

King は, ゲルマン諸語間での動詞接辞の子音の現れ方の相違はこれらの規則の共時的な適用順序の違いによって生じたとしている。そして King (1968 : 259-60) は, その規則の適用順序はゴート語では A—B, 古アイスランド語では A—C—B, 古高地ドイツ語では A'—B—C—D, そしてイングヴィオニックでは B—A—C であったと考える。このことを King (1968 : 260) は次のように図示している (ただし前述のように2人称複数は除外する)。

	2人称単数	3人称単数	3人称複数
	<i>βindiz</i>	<i>βindid</i>	<i>βindand</i>
		ゴート語	
A	<i>bindiz</i>	<i>bindid</i>	<i>bindand</i>

B	bindis	bindiθ	_____
		古アイスランド語	
A	bindiz	bindið	bindand
C	bindiR	_____	_____
B	_____	bindiθ	_____
		古高地ドイツ語	
A'	bindiz	bindid	bindand
B	bindis	_____	_____
C	_____	_____	_____
D	bintis	bintit	bintant
		イングヴィオニック	
B	βindis	βindiθ	βindanθ
A	bindis	bindiθ	bindanθ
C	_____	_____	_____

King (1968 : 263-4) は、イングヴィオニックの場合も最古の段階では他のゲルマン語におけると同様、規則の適用順序は

	/βinðiz/	/βinðið/	/βindanð/
A	bindiz	bindið	bindand
B	bindis	bindiθ	_____

であったが、Kiparsky (1968 : 200) による「規則の順序はそれらが最大限に適用されるような方向に移行する傾向がある」という原則により、後に規則の並べ換えが起こったのだとしている。

しかし Fullerton (1974 : 75) は、King の見解では説明のつかない例として、西ゲルマン語における *ō*-語幹名詞（印欧祖語の *ā*-語幹名詞）の主格と対格の複数形で例えば OE *giefa*, *giefe*, OS, OHG *geba* 'gifts' < Gmc. **γeβōz* (Go. *gibōs*, OI *giafar*) を挙げている。すなわち彼は、King による規則を Gmc. **γeβōz* に適用すると次のような派生となってしまう、正しい出力が得られないとしている。

	OHG		Ingv.
	/γeβōz/		/γeβōz/
A'	gebōz	B	γeβōs
B	gebōs	A	_____
C	_____	C	_____
D	_____		
表層 :	*gebōs	OS	*gebos, OE *giefas

Fullerton (1974 : 75, 79) の言うように、西ゲルマン語では、接辞の Gmc. $-ōz$ は規則 C が規則 B に先立って適用されて $-ōR$ となり、R の前で $ō$ は $ā$ となり、末尾のこの R が消失するというのが実際の出力を派生する正しい過程であると考えられるのである。

また動詞の複数接辞の場合、King によれば、イングヴィオニックでは鼻音の後の末尾の $ð$ は規則 A に先立って規則 B を被ったということであるが、Fullerton (1974 : 76) の指摘するように、これにも反例と思われる形がある。それは例えば OE *bindan* の過去 *band* であり、その基底形は $/βandð/$ であったと考えられるが、これに King の考える B—A の順序で規則が適用されると $/βandð/ > βanθ > OE *bōθ$ となってしまうことから、*band* の *d* は末尾の $ð$ が規則 B に先立って規則 A を被っていたことを示すものである。

結局、西ゲルマン語における正しい適用順序は、北ゲルマン語と同じ A(A')—C—B であったということになるのではないだろうか。

従って、s に関して言えば、2人称単数接辞の末尾の WGmc. *s* は規則の並べ換えによるものではなく、やはり後続の人称代名詞 θu との結合による *z* の無声化に由来するものではないだろうか。Fullerton (1975 : 100) はこの *s* の誕生をさらに理論的に次のように説明する。西ゲルマン語ではまず θu *bindiR* と *bindistu* という交替形が現れ、これらは基底では $/βindiz/$ と $/\theta u/$ とからなっていた。しかし末尾の R が消失したため、表層では接辞子音は θu *bindi* と *bindistu* のようなゼロと *s* の交替として現れるようになった。その結果 $/-z/$ が $-R$ となる規則が消失すると、やがて $/-z/$ は表層での後者の *bindistu* にならい $/-s/$ となった。そのため *bindi* の派生は、2人称単数においてのみ末尾の *s* を削除するという特殊な規則によってなされねばならなくなった。この規則はこのように他に例のない特殊な規則であったためにやがて消失した結果、基底の $/βindis/$ はそれに θu が後続するか否かに関係なく末尾に *s* を有する *bindis* として現れるようになったという。

しかし強変化動詞の直説法現在2人称単数接辞のゲルマン祖語形はより正確に言えば、*i*-語幹名詞の主格単数接辞の Gmc. $-iz$ ($> WGmc. -iR > -i$) とは異なり、*z* に *i* の後続した $-izi$ であったと考えられる。そして Wright & Wright, Campbell, Brunner の考え方に従うならば、Fullerton の見解とは異なり、西ゲルマン語においてはむしろ *z* は、Gmc. $-izi$ が WGmc. $-iR$ ではなく末尾の *i* を保持したまま $-iRi$ 、そして $-iri$ となることにより、結局 WGmc. *r* として末尾に残るのが本来の発達であったとも考えられるのである。もしそうであれば、西ゲルマン語における2人称単数現在の接辞の末尾子音は表層では、Fullerton (1975) の考えるゼロと *s* との交替ではなく、*r* と *s* との交替として現れていたことになるであろう。その場合、*r* は音声的にかなりかけ離れてしまった基底の $/-s/$ から無理に導き出さねばならなくなる。そしてそのような規則はやがて不自然なものとして消失した結果、表層ではこの接辞の末尾子音はすべて *s* として現れるようになったという解釈も可能になるのではないだろうか。

むしろ Fullerton (1975) の見解がより確実に当てはまるのは、西ゲルマン諸語の接続法 2 人称単数の現在と過去の OHG -s, -st, OS -s (Go. -s, OI -r), そして弱変化動詞の直説法過去 2 人称単数の OE, OHG -s, -st, OS -s (Go. -s, OI -r) の方ではないだろうか。なぜならば印欧祖語においては直説法現在とは異なり、前者は現在が二重母音プラス s, 過去が長母音プラス s, そして後者は同じく長母音プラス s で終わっていたからであり、これは前記の Gmc. **ȝeβōz* 'gifts' (<IE **ghebhās*) と同じく本来ならば、末尾の IE s は Gmc. z となり、それは西ゲルマン語では R となり、明らかに消失していたはずだからである。現に古英語の接続法は、古サクソン語そして古高地ドイツ語とは異なり、IE s の反映を失っているものであり、これは後続の人称代名詞 *thū* とは結合していない方の本来の発達を示していると言えるであろう。

他方、a-語幹名詞（印欧祖語の o-語幹名詞）の主格と対格の複数形の場合、西ゲルマン語内で OE *dagas*, OS *dagos*, *dagas*, OHG *taga* (*tagā*) 'days' のように末尾に s の残った形とそうでない形とが存在するのはなぜであろうか。Fullerton (1974 : 79-80) は、OHG *taga* (彼は *tagā* がもとの形、その -*ā* の短化した結果が *taga* であるとしている) は *geba* 'gifts' と同じ Gmc. -*ōz* という接辞を持つ主格の Gmc. **dayōz* (Go. *dagōs*, (PN **dayōR* >) OI *dagar*) <IE -o-es の方に由来するが、イングヴィオニックにおける複数是对格の Gmc. **dayanz* (Go. *dagans*, (PN **dayann* >) OI *daga*) <IE -ons の方に由来するとしており、問題の後者の場合、無強勢音節で末尾では母音ではなく子音（この場合は鼻音 n) の後に限っては z は、z > R となる規則 C が働く前に s に無声化され、それがそのまま残存したものと考える。

確かに前述のように Fullerton は西ゲルマン語における規則の適用順序は北ゲルマン語と同じ A(A')—C—B であるとしているのであるが、このイングヴィオニックの例の場合は Fullerton 自身の考えに反し、無声化規則、すなわち規則 B が規則 C に先行することになってしまう。

そこで Fullerton (1974 : 80) は、無強勢音節で、きこえ度 (sonority) の大きい分節素である母音ではなく、きこえ度の小さい分節素である子音がじかに先行するという環境にある末尾の有声摩擦音を無声化する、規則 B とはまた別の規則が早期のイングヴィオニックにおいて規則 A に先立って導入されていたものとする。そして彼は、イングヴィオニックにおけるこの a-語幹名詞の複数接辞 -ans (<-anz) だけでなく、動詞の複数接辞 -anθ (<-anð) もまた、この早期の無声化規則による結果であるとしている。この規則は規則 B と同じ無声化規則ではあっても、それが適用される環境は上述のように大きく制約されていた。やがてこの制約された無声化規則が消失し、より後期のイングヴィオニックにおいて規則 C の後に導入されたのが、上述のような制約のなくなった無声化規則 B ということになるのであり、3 人称単数接辞の末尾の無声摩擦音 θ (<ð) はもちろんこの規則 B の結果であるということになる。

しかし同じイングヴィオニックにおいても、弱変化動詞の過去分詞の接辞は3人称単数のそれと、また nd-語幹名詞の接辞は動詞の複数接辞と同じく、各々 IE t, nt に由来し、しかも同様の環境にあったにもかかわらず、結局は各々 OE *nered*, OS *ginerid* ‘saved’; OE *wealdend*, OS *waldand* ‘ruler’ のように d, nd で終わっているのはなぜであろうか。

この点について Fullerton (1974 : 81) は次のように考える。nd-語幹名詞では、その屈折において an δ に接辞母音も何も後続しなかった場合には /an δ / は前述の早期の無声化規則によって実際に an θ となっていたが、屈折において接辞母音が後続した場合には規則 A により and となっていた。従って -an θ ~-and- という交替が実際に生じていたものと思われる。やがて早期の無声化規則が消失すると、接辞母音の後続しない屈折形においては /an δ / の δ は無声化されなくなったため、接辞母音の後続する他の屈折形と同様に規則 A による閉鎖音化を被ることになった結果、nd で終わる形が誕生したのである。他方、nd-語幹名詞におけるような交替が初めからなかった動詞の複数接辞と a-語幹名詞の主格と対格の複数接辞の場合、早期の無声化規則が消失すると、その基底表示もそれまでの /an δ /, /anz/ からそれぞれ早期の無声化規則による表層の結果音と同じ /an θ /, /ans/ に変わったと考えられるのであり、結局その表層形は規則の消失には影響されていないわけである。

同様のことは弱変化動詞の過去分詞と3人称単数接辞についても言えるであろう。すなわち前者は元来は屈折に伴い (/ δ />) - θ ~- δ - という交替を行っていたと考えられるのに対し、後者にはそれがまったくなかったということである。ただしこの場合にかかわってくる規則は無声化の規則 B である。そしてやがて規則 B が消失すると、前者の場合、/ δ / は無声化されなくなり、後にさらに δ がすべての環境で無条件に閉鎖音化された結果、d で終わる形が誕生したのである。しかし、後者の場合には前者におけるような交替が初めからなかったため、無声摩擦音 θ で終わる形がそのまま継承されているわけである。

他方、Voyles (1988) は、出発点としては King, Fullerton とは異なり、元来ゲルマン語の動詞の現在形は語根に強勢を持つタイプと接辞母音の方に強勢を持つタイプとにはっきりと分かれていたとしている。そして Voyles (1988 : 67) は、前者のタイプには強変化動詞類が、また後者のタイプには例えば OHG *neriu* ‘I save’ < IE **nosjō*, そして Fullerton が指摘したのと同類の OHG *salbōm* ‘I apply salve to’ < IE **solpāmi*, Go. *haba* ‘I take, have’ < IE **kapō* のような弱変化動詞類があったと考える。また Voyles (1988 : 68) は、古サクソン語の3人称単数の接辞には -ith だけでなく、ヴェルネルの法則を反映すると思われる -id も例証されるという事実を指摘しており、前者は IE -*éti* (IE **nosjéti* ‘he saves’) に、後者は IE -*eti* (IE **déuketi* ‘he leads’) に由来すると考え、後にこの両接辞が古サクソン語で自由変異形として現れるようになったとしている。

OE, OS *nerian*, OHG *nerien*, *nerren* ‘to save’ (< WGmc. **narjan*) は従来は、強変化動詞の o-階段の語根から形成された使役動詞に由来するとされている。すなわちそれは印

欧祖語の語根 *nos- プラス使役動詞を派生する接辞 -éj- (Skt. -áy-) プラス連結母音 e/o プラス人称語尾に由来するとみなすのが通説である。しかし Voyles (1988 : 67, 68, 70) はその 1 人称単数形には IE *nosjō, 3 人称単数形には IE *nosjéti という、語根に j がじかに後続し、連結母音 e/o に強勢のある形を仮定しており、また OS hōrian (OE hieran) 'to hear' にも同様の IE *kousjón という形を仮定している。Voyles (1988 : 74, 86-7) はまた 'to save', 'to hear' の過去形に対しては各々、歯音接辞後位置に強勢を持つ IE *nositós (>OHG neritōs), IE *kousitóm (>Go. hausida) という形を仮定している。そして Voyles (1988 : 69-72) は、Gmc. *hausj^z のゴート語形の語根末子音がヴェルネルの法則を受けていないのは、東ゲルマン語の地域では北、西ゲルマン語の地域とは異なり、強勢の語根への推移がヴェルネルの法則に先立って起こっていたためであるとしている。もしそうであれば、西ゲルマン語の弱変化動詞の直説法過去 2 人称単数接辞の末尾子音がそのまま s として現れているのも、後続の人称代名詞 θu との結合のためではなく、ヴェルネルの法則の時にはまだ過去形の歯音接辞後位置に強勢を持っていたためということになるであろう。さらに彼は、ゴート語の強変化動詞の過去複数と過去分詞の語根末子音にヴェルネルの法則が欠如しているのも、東ゲルマン語における強勢の語根への早期の推移によるものであり、従来主張されている水平化によるものではないとしている。

Voyles は直説法現在の接辞の末尾子音の現れ方の不一致については実際には古サクソン語の 3 人称単数にしか触れていないが、彼の説明を見る限りでは、予想に反するような、ゴート語におけるヴェルネルの法則の欠如の原因を類推による水平化以外の考え方で説明可能にはしても、ゲルマン諸語の、特にゴート語以外の動詞における接辞の末尾子音の現れ方の不一致は、個々のゲルマン語が無声音と有声音のどちらかをまったく気まぐれに選択した結果としてしか説明できないことになるのではないだろうか。また Fullerton (1974 : 71) の言うように、古サクソン語の 3 人称単数の th, d はゲルマン祖語における強勢の位置の相違を反映するものではなく、d はむしろ古サクソン語における θ>d という変化の結果であるということではないだろうか。このことをはっきりと裏付けられると思われる事実として注目すべきことは、d は 3 人称単数のみならず、-ad のように複数人称においてもまた見られるということである。この -ad は疑いなく -anθ>-aθ>-ad という音過程の結果であり、ヴェルネルの法則を反映する Gmc. -and からは決して導き出せるものではない。

そして本稿でまだ論じていなかったのは、a-語幹名詞の属格単数接辞の OE -es (<-æs), OS, OHG -es, -as, OI -s (<PN -as) の末尾子音 s についてである。OS, OHG -es は通常 Go. -is と同じく IE -eso に由来するとされる。その根拠としてしばしば代名詞の属格単数形である古ブルガリア語の česo, Gk. téo 'wessen' <IE *k^weso が挙げられる。そして OE -es, OS, OHG -as, OI -s は、その連結母音が IE -eso とはアプラウトの関係にある IE -oso (Gk. -ou) に由来するとされる。

Prokosch (1939 : 234), Campbell (1959 : 223) は、属格単数接辞の子音が s のままであるのは強勢が語根ではなく連結母音にあったためであると考える。しかし Must (1953 : 302) は、もし連結母音の方に強勢があったのであれば、OHG wolf ‘wolf’ の属格単数は実際の wolfes ではなく、語根末子音がヴェルネルの法則を反映する *wolbes となっていたはずであるとしている。また Wright & Wright (1925³ : 175, 176) のように、属格単数の s は代名詞の属格単数 (OE *pæs, pes* ‘of the/that’) から取り入れたものとする学者もいる。

しかし他の印欧語には Gk. Hom. -oio, Skt. -asya という形もあることから、IE -osjo という形もまた推定される。そして Must (1953) はこの -osjo を支持し、彼は無強勢音節の接辞でもこのように s は母音間ではなく子音 j の前に位置したため、無声音のまま保たれたと考える。もしそうであれば、Go. -is, さらに OS, OHG -es は IE -osjo にならば IE -esjo に由来するという可能性も出て来るであろう。

Go. -is は恐らくヴェルネルの法則による結果音 -iz の z の末尾での無声化を受けた結果であろう。von Kienle (1969² : 130), Voyles (1988 : 70) の言うように、ゴート語にはこの属格単数接辞に母音が後続する *anþarizuh* ‘and of the other one’ という形が見られることから、Go. -is の s は z であったことがわかるのである。従ってこの場合 Must の考え方に従うならば、Go. -is は IE -esjo ではなく IE -eso の方に由来するということになる。

しかし Voyles (1988 : 70) は OS -es には連結母音に強勢を持つ IE -éso を仮定している。そして彼は、ゲルマン語の a-語幹名詞の属格単数接辞はすべてこのように連結母音に強勢を有していたとしている。もしそうであれば、北、西ゲルマン語のこの接辞におけるヴェルネルの法則の欠如は説明がつく。他方、ゴート語の接辞だけがヴェルネルの法則を被っているのはなぜであろうか。Voyles (1988 : 70) は、前記の動詞の場合と同様に、それは東ゲルマン語では北、西ゲルマン語とは異なり、強勢の語根への推移がヴェルネルの法則に先立って起こっていたためであるとしている。Voyles (1988 : 66) は、男性 a-語幹名詞 ‘day’ そして *ō*-語幹名詞 ‘gift’ の印欧祖語における屈折形とその強勢の位置を次のように図示している。

	単数	複数
主格	*dhógvhos	*dhógvhōses
属格	*dhogvhéso	*dhogvhóm
与格	*dhogvhói	*dhogvhómis
対格	*dhógvhom	*dhógvhons
主格	*ghébhā	*ghébhās
属格	*ghébhās	*ghebhóm
与格	*ghébhāi	*ghebhámis
対格	*ghébhām	*ghébhāns

現に、例えば中性 a-語幹名詞の OE horh ‘dirt’ (主格単数), horwe (与格単数); holh ‘hollow, hole’, holwes (属格単数) のように、a-語幹名詞には Voyles が図示したような強勢の位置の違いによると思われる語根末子音の交替を残している例もある。この場合の語根末子音はいずれも IE k^w に由来し、h はグリムの法則による Gmc. x^w を、w はヴェルネルの法則による Gmc. γ^w を反映している。そして後に水平化が起こった結果、horwes, horwe は各々 horh にならい、*horxes, *horxe を経て hōres, hōre となっている。同じく holwes は後に holh にならい、*holxes を経て hōles となっている。同様のことは Must の挙げた OHG wolfes についても言えるであろう。すなわちヴェルネルの法則を反映する OHG *wolbes という時期もあったと思われるのであり、実在形の wolfes は後の水平化の結果であるとみなすことができるであろう。

Voyles (1988 : 69-70) によれば、(1)東ゲルマン語では、単数の属格と与格においては強勢はヴェルネルの法則に先立って接辞から語根へと移ったが、複数の属格と与格は接辞の強勢を保持し、(2)やがてヴェルネルの法則による有声化が起こり、(3)東ゲルマン語で強勢推移を免れていた複数の属格と与格において、そしてようやく北、西ゲルマン語において、語根への強勢推移が起こった。

Voyles のこの見解に従うならば、前記のゴート語の動詞の語根末子音におけるヴェルネルの法則の欠如と同様に、ō-語幹名詞の Go. giba ‘gift’ (<Gmc. * $\gamma\acute{e}\beta\acute{o}$ <IE * $gh\acute{e}bh\acute{a}$) の対格単数 giba (<Gmc. * $\gamma\acute{e}\beta\acute{o}m$ <IE * $gh\acute{e}bh\acute{a}m$) と属格複数 gibō (<Gmc. * $\gamma\epsilon\beta\acute{o}m$ <IE * $ghebh\acute{a}m$) における接辞母音の違いも説明がつく。

しかし Go. dius ‘animal’ の語根末子音 s は、その属格単数 diuzis から見て、ヴェルネルの法則による z の反映であると考えられるのであり、これは Voyles の上記(1)の見解に対する例外または反例となるように思われる。あるいはこれは複数の属格と与格からの影響による水平化の結果なのかもしれない。

また北、西ゲルマン語の名詞の場合、語根末子音が印欧祖語の無声音に由来するものでも、前記の OHG wolf と同じく例えば OE āp ‘oath’ (男性 a-語幹名詞), lapu ‘invitation’ (ō-語幹名詞) のように語根末子音がゲルマン祖語のもっぱら無声音を反映するものと、OE dēor ‘animal’ (中性 a-語幹名詞, cf. Go. dius, diuzis), lār ‘learning’ (<IE * $klois-$) のように語根末子音もっぱらヴェルネルの法則を反映するものが例証される。後者のような名詞は例えば Wright & Wright (1925³ : 176) のように、元来その屈折においてもっぱら接辞の方に強勢を有していたためとする考え方もできるであろう。Voyles (1988 : 68) はこのような考え方を前提とした OE āp, dēor の印欧祖語における単数形を次のように表記する。

主格	*óitos	*dheusóm
属格	*óiteso	*dheuséso
与格	*óitōi	*dheusói

対格 *óitom *dheusóm

もしこのとおりであったならば Voyles (1988 : 68-9) の言うように、北、西ゲルマン語では、a-語幹名詞の男性主格単数接辞には (IE -ós>)-as, 属格単数接辞には (無強勢の IE -eso>-ezo>)-er (あるいはむしろ -ir), ō-語幹名詞の属格単数接辞には (IE -ás>)-ōs という形も現れることになるであろうが、これは実際にはまったく例証されないのである。結局、語根末子音が印欧祖語の無声音である a-語幹と ō-語幹のどの名詞の屈折においても元来は子音交替が起こっていたのであり、強勢の語根への推移後、ある名詞の語根末子音にはもっぱら無声音の方が、またある名詞の語根末子音にはもっぱらヴェルネルの法則による有声音の方が一般化されたものと思われる。そして前者に当たるのが āp, lapu, 後者に当たるのが dēor, lār であると考えられる。

最後に、男性 a-語幹名詞の複数の主格と対格について触れておきたい。

Voyles (1988 : 66, 69) は Fullerton (1974) とは異なり、男性 a-語幹名詞の主格複数接辞は通説の IE -ōs ではなく -ōses, -ōses に由来するとしており、OS -os (OE -as) は強勢を有する方の IE -ōses (>WGmc. -ōs) に由来すると考えられる。確かに通説の IE -ōs (>Gmc. -ōz) は Go. -ōs, OHG -ā, -a, OI -ar を説明するが、OS -os, OE -as, OFris. -ar を説明しない。すなわち古フリジア語では IE -ōs>Gmc. -ōz の z が消失するのが本来の発達である。そこで、Fullerton (1974) が対格の (IE -ons>) Gmc. -anz からの発達を考えたのに対し、Voyles は OS -os (OE -as) を主格から直接導き出すために IE -ōses を仮定する。OS -os, OE -as は IE -ōs に由来するともみなせるであろうが、それでもなお -ōses という、さらに -es の後続する二重語尾が仮定されるのは、ヴェーダ語の同じ複数に -āsas という接辞があり、しかも無強勢の方の -ōses は西ゲルマン語において末尾に唯一 Gmc. z の反映としての r を保ち、IE -ōs では説明し難い OFris. -ar を説明するからである。

Voyles (1988 : 80, 82) はまた、Fullerton (1974) とは異なり、対格複数接辞の IE -ons> Gmc. -anz は Ingv. -ans (>OS -os, OE -as) となったのではなく、NWGmc. -ann>-an>-a (>OHG, OI -a) となったとする。もしそうであれば、Fullerton (1974) の見解とは逆に、古高地ドイツ語では対格複数と同形の主格複数 -a は IE -ōses または -ōses を継承するはずの本来の主格複数が対格複数に取って代られた結果であるということになり、また主格複数と同形の対格複数の OS -os, OE -as, OFris. -ar は反対に、本来の対格複数が主格複数に取って代られた結果であるということになる。

結 語

Wright & Wright, Campbell, Brunner, von Kienle は、直説法現在の接辞における末尾の、ヴェルネルの法則への例外のように見える無声摩擦音 s, θ は強勢を語根にではなく連

結母音の方に持つ動詞のタイプに由来すると考え、Voyles はそのような動詞のタイプとして、弱変化動詞の第1類から第3類までの、語根末子音がヴェルネルの法則を反映するもの（例えば OHG *neriu*, *salbōm*, Go. *haba*）を挙げている。Voyles によればさらに、東ゲルマン語ではヴェルネルの法則に先立って語根への強勢推移が起こったが、北、西ゲルマン語では語根への強勢推移は逆にヴェルネルの法則後であった。この見解に従うならば、動詞に関しては、ゴート語の強変化動詞の過去複数と過去分詞における、そして弱変化動詞第1類の例えば Go. *nasjan*, *nasida*, Go. *hausjan*, *hausida* におけるヴェルネルの法則の欠如の原因は説明できる。しかし直説法現在の接辞における子音の現れ方の不一致は個々のゲルマン語が語根強勢を持つタイプの反映と接辞強勢を持つタイプの反映のいずれかを気まぐれに選択した結果としか説明できていない点は不満が残る。

King は、すでにゲルマン祖語において IE *s*, *t* に由来する直説法現在の接辞子音としては *z*, *ð* が一般化されていたという出発点に立ち、西ゲルマン語における例外のような現れ方は音韻規則の並べ換えの結果であると考え。Fullerton は、King と同じ *z*, *ð* という出発点に立ちながらも、音韻規則の並べ換えという King の見解に対するいくつかの反例を挙げている。Fullerton は、音韻規則の適用順序はすべてのゲルマン語において元来は同じであったが、イングヴィオニックには King の考える規則に先立ち、無強勢音節において *n* の後の末尾の *z*, *ð* を無声化する独自の規則があったのだとしている。また Fullerton は、西ゲルマン語における2人称単数の *s* は後続の代名詞 *θu* との結合に由来するものであるということを音韻論的に説明している。

このように動詞接辞に関しては Voyles よりも Fullerton の見解の方がより説得力があるように思われる。しかし名詞接辞に関する Voyles の見解は Fullerton に劣らず説得力があると言えるであろう。

a-語幹名詞における接辞の末尾の *s* については、Voyles は名詞の屈折における格と数によって語根と接辞のどちらに強勢があったかが決まっていたためであるとしている。このことは名詞の屈折における語根末子音の交替を反映すると思われる残存例によって裏付けられるであろう。そこへさらに東ゲルマン語と北、西ゲルマン語とでは語根への強勢推移の時期が異なっていたとする考え方を取り入れるならば、それは属格単数接辞が IE *-osjo* に由来するという Must の見解よりも説得力があり、また主格と対格の複数における *s* に関しては、Fullerton の考えるような早期の無声化規則はなしですむわけである。

以上のように、ゲルマン諸語における接辞の末尾子音 *s*, *θ* は多くの複雑な問題をはらんでいるのである。

参 考 文 献

- Braune, W. & E. A. Ebbinghaus. 1989¹⁵. *Abriss der althochdeutschen Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.

- Brunner, K. 1960-2nd. *Die englische Sprache: ihre geschichtliche Entwicklung*. 2 vols. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Fullerton, G. L. 1974. "The development of obstruents in four Germanic endings." *Linguistics* 130, 71-82.
- Fullerton, G. L. 1975. "Grimm's Law and the WGmc. 2sg. verb ending *-s*." *Linguistics* 145, 87-102.
- King, R. D. 1968. "Root versus suffix accent in the Germanic present indicative." *JL* 4, 247-65.
- Kiparsky, P. 1968. "Linguistic universals and linguistic change." *Universals in linguistic theory* (E. Bach & R. T. Harms, eds.), 170-202. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Must, G. 1953. "The genitive singular of *o*-stems in Germanic." *Lg.* 29, 301-5.
- Prokosch, E. 1939. *A comparative Germanic grammar*. Philadelphia: Linguistic Society of America.
- Ramat, P. 1969. *Grammatica dell'antico sassone*. Milano: Mursia.
- Streitberg, W. 1896. *Urgermanische Grammatik*. Heidelberg: Winter.
- von Kienle, R. 1969². *Historische Laut- und Formenlehre des Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Voyles, J. B. 1988. "Early Germanic changes in unstressed word-final syllables." *Lingua* 76, 63-90.
- Wright, J. 1910. *Grammar of the Gothic language*. Oxford: Oxford University Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.